

ブレンド型授業の良さとeラーニングおよびグループワークの関係

向 後 千 春

(早稲田大学人間科学学術院)

1. 問題

eラーニングと対面授業を組み合わせた授業は、ブレンド型学習と呼ばれるものの1つの形態である。ブレンド型学習は、eラーニングと対面授業のそれぞれの長所を取り入れており、その学習効果も高くなることが期待できる。しかし、学生にとってブレンド型学習は日本ではまだ目新しい授業形態である。向後・冨永(2010)は、eラーニング指向性尺度、ブレンド型授業指向性尺度、グループワーク指向性尺度を開発し、ブレンド型授業を体験したあとにそれぞれの指向性がどのように変化するかを検討した。本報告では、その尺度を用いて、eラーニング、ブレンド型授業、グループワークに対する好みと認知がそれらの間でどのような関係にあるかについて、明らかにする。

2. 授業

授業は、私立大学で2010年度秋学期に開講された、情報社会に関する科目と教授法に関する科目であった。これらの科目は、eラーニングシステムによって配信された講義ビデオを視聴して課題を各自で行う週と、教室に集合してグループワーク中心の活動を行う週が交代で実施された。

講義ビデオは、自宅または大学端末室で視聴できるようになっており、30~60分程度の長さであった。また、各回ごとに課題が出されており、その課題は次の教室授業で行う活動に関連するものであった。

教室授業では講義は行われず、5人で1つのグループを組み、グループ活動を行った。具体的には、グループごとの討論やブレインストーミング、プレゼンテーションの準備などであった。また、グループ活動の成果として、グループ間で発表があったり、または、前に出て全体にプレゼンテーションをするなどの活動が行われた。

3. 調査

対面授業の最終回に、質問紙による調査を実施した。質問紙は、eラーニング、ブレンド型授業、グループワークに対する好み(5段階尺度)、向後・冨永(2010)で開発された、eラーニング指向性尺度、ブレンド型授業指向性尺度、グループワーク指向性尺度などからなっていた。

4. 結果と考察

eラーニング、ブレンド型授業、グループワークに対する好みの評定同士の偏相関係数は図1の通りであった(N=232)。

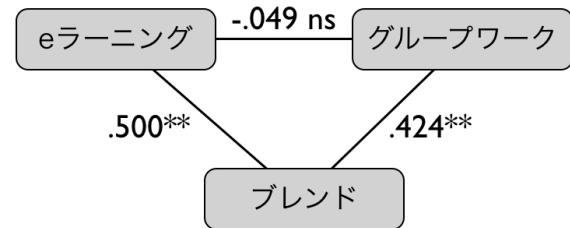


図1 各学習形態の好みの評定同士の偏相関係数

これより、eラーニングの好みとグループワークの好みとは独立した判断であることがわかった。さらに、ブレンド型授業の好みは、eラーニングの好みとグループワークの好みとの両方に相関があることがわかった。これは、この授業のようなブレンド型の授業を好む人は、eラーニングとグループワークの両方を好んでいる場合が多いということを示している。

さらに、eラーニング、ブレンド型授業、グループワークのそれぞれの指向性尺度による尺度得点と好みの評定値を因子分析したところ(プロマックス法、3次元解、累積66.1%)、概略以下のような解釈ができる結果であった。第1因子は、ブレンド授業を評価する軸で、これはeラーニングとグループワークを好む負荷も高くなっており、図1の偏相関の結果を支持している。第2因子は、グループワークを評価する軸で、グループワークスキルの負荷も高いのと同時に、eラーニングを単調で臨場感がないとする負荷も高い。第3因子は、eラーニングを評価する軸で、eラーニングの柔軟性を評価する項目の負荷が高い。ブレンド授業が効果的であるとする項目の負荷は、3つの因子ともに高く、グループワークの臨場感とeラーニングの柔軟性の2つがあいまってブレンド授業の良さを形成していることが示唆された。

引用文献

向後・冨永(2010)ブレンド型授業の前後における受講生のeラーニング指向性の変化 日本教育工学会研究会報告集, JSET10-2, 103-110